

イタリアの「言語問題」における言語と文体の概念(Ⅱ)

ダンテ『俗語論』はどのように読まれたか

糟谷啓介

1 クルスカ対反クルスカの抗争

16世紀前半に、ベンボ、トリッシーノ、マキャヴェッリらの間の論争として始まった「言語問題」は、クルスカ・アカデミーの設立によって一定の決着を見た。アカデミーの任務は、1300年代のフィレンツェ語に言語の純粋性を見出し、それを保存するために、文法から語彙に及ぶまで逸脱を許さない基準を提示することであった。その最初の成果として現れたのが、1612年に刊行された『クルスカ・アカデミー辞書』第一版である。その序文「読者へ」では、この辞書がベンボとサルヴィアティの考えに基づいて、「このことはがとりわけ花咲いていたとき、すなわちダンテの時代あるいはその少し前から、ボッカッチョの死の数年後に至るまでの時期に生きていた作家たちの権威」(Accademia della Crusca 1612: A lettori)に従うことが表明される。事実、語彙の選定の基準は、まずダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョなどの大作家からは「すべての語を無差別に採る」とされ、それを補完するものとして、1300年代フィレンツェ文学のマイナーな作家たち、さらに1300年代の言葉を用いた1500年代の作家たち(ベンボ、アリオストなど)が対象となる。クルスカ辞書の目的は、言語の権威の拠り所である古典作家(auctores)を選定することにはかならなかった。

とはいえ、クルスカ・アカデミーが、いかに「フィレンツェの言語的遺産の仮借ない保護者」(Vitale 1986: 124)を自任したとしても、その立場の内部にはある揺れがなかったわけではない。そのことはクルスカ辞書の書名そのものに現れている。最初の案は「クル

スカ・アカデミー会員のトスカナ語の辞書(Vocabolario della lingua toscana degli Accademici della Crusca)」、次の案は「クルスカ・アカデミー会員によりフィレンツェの作家と慣用から採られたトスカナ語の辞書(Vocabolario della lingua toscana cavato dagli scrittori e uso della città di Firenze dagli Accademici della Crusca)」であったが、最終的に「トスカナ語」への言及は避けられ、「クルスカ・アカデミー会員の辞書(Vocabolario degli Accademici della Crusca)」という短い書名に落ち着いた(Vitale 1986: 126-127)。

これを見ればわかるように、刊行されたクルスカ辞書には、言語名が書かれていない。つまり、何語の辞書であるかが明言されていない。それは、言語名を明示することにより生ずるさまざまな問題を避けたからである。たとえば、トスカナ語といえば、フィレンツェ以外の都市も入ってしまうので、それらの都市が言語の権威を要求しはじめる可能性があった(たとえば、シエーナに関しては Vitale 1992: 143-179)。もちろん「イタリア語(lingua italiana)」とはいえない。なぜなら、クルスカが否定したトリッシーノの共通混濁語としての「イタリア語」という考えを呼びおこしてしまうからである。ちなみに、クルスカ辞書第一版には“italiano”という語は登録されていない。その代わりに“italico”という形容詞が登録されている。これはマキャヴェッリが『叙説と対話』で使っていた形容詞である。

イタリアの言語問題においては、イタリアの規範となる言語を何と呼ぶのかという問題に多くの議論が費やされた。それはフィレンツェ語なのか、トスカナ語なのか、イタリア語なのか？ この言語の呼称の問題が焦眉の課題として成立したことに、イタリアの言語問題の現実から遊離した形式性を見ることもできようが、しかし他方から見るなら、言語の規範の本体たる言語を名指すことができないという事態は、言語問題の深刻性を表わしているともいえる。いうまでもなく、言語の名称は、その言語が確固とした対象として存在することを保証するものである。なぜなら、言語状態が安定した状況にあっては、暗黙のうちに承認された言語名を出発点として、その言語について語る言説が成立するからである(言語の名称の問題については、Tabouret-Keller 1997が参考になる。)

ともあれ、クルスカ・アカデミーが言語の規範としてのクルスカ辞書を刊行したことは、ベンボからサルヴィアーティに至る古典主義的純粹主義(purismo)⁽¹⁾の立場を鮮明にすることになった。そして、クルスカの立場に反対する者にとっても、クルスカ辞書は格好の標的になった。そのようなわけで、これ以後の「言語問題」は、このクルスカ辞書をめぐる議論に多くが費やされる。ただし、クルスカの立場に反対するといっても、クルスカの

基準の狭さに異議申し立てをするだけであり、イタリア文学語のあり方そのものが問題視されることはなかった。こうした議論の枠組みに変化が生じはじめるのは、18世紀後半になってフランス啓蒙主義の影響がイタリアに浸透するにしたがって、文化と社会の改革を目指す一連の知識人が出現してからである。そのとき「言語問題」は文学語の圏域から離れて、ようやく言語の社会的次元の問題に到達したといえる。

ひとつの例だけを挙げれば、アレッサンドロとピエトロのヴェッリ兄弟、チェーザレ・ベッカリーアを中心にミラノで形成された啓蒙主義者のグループがある。彼らは1764年に雑誌『カフェ(Caffè)』を刊行し、そこで数々の伝統主義批判の論陣を張った。雑誌自体は2年ほどしか続かなかったが、その主張がきわめて急進的だったために、多くの注目を集めた。彼らにとって言語の領域で倒すべき敵であったのは、やはりクルスカ・アカデミーであった。そうした態度が最も鮮明に現れているのが、アレッサンドロ・ヴェッリの短いきわめて論争的な論説「クルスカ辞書の放棄」(1764)(Roverato 1975: 141-145に収録)である。

ヴェッリは、カフェ・グループの信条は「言葉より観念を優先させること」だということ。ことばは過去に書かれた書物にはなく、世界の秩序にこそ忠実でなければならない。修辭学的規則や古典作家の模範に従うことは、「思考と理性の公正な自由で課せられた不正なわな」なのである。こうしてヴェッリは「トスカナ語の純粋性とされているものを放棄する」必要性を説く。代わりに主張されるのは、人間精神の進歩に即した語彙の拡大であり、その手段として造語や借用語が正当化される。ヴェッリはこういう。「語が観念に仕えるのであって、観念が語に仕えるのではないから、良いものがあるなら、宇宙の果てからでも持ってきたものだ」(Roverato 1975: 142)。とはいえ、ヴェッリらが借用語の主な供給源としたのは、「宇宙の果て」ではなく、隣国フランスであったのだが、この点はこのでは論じない。

語彙の増大による言語の「富裕化」への志向は、「啓蒙主義言語論」に共通するプログラムであったので、この点でヴェッリの主張にとりわけ独創性があるわけではない。とはいえ、ヴェッリが「レージョ・ディ・カラブリア」[(引用者注)イタリア南部カラブリア地方の都市]からアルプス山脈までに至る教養人(uomini colti)によって理解される言語」(Roverato 1975: 142)を雑誌『カフェ』で用いると述べている点に注目すべきである。ここには、「イタリア」と呼ばれる土地のすべてに共通する文化言語、フィレンツェを中心に置かない「イタリア共通語」という考え方が潜んでおり、ダンテの名前は挙げられていな

いものの、「高貴な俗語」の理念が連綿と生きつづけていることを示している。

2 言語の「国民評議会」——チェザロッチェ『言語哲学論』

イタリアの啓蒙主義言語論として残された著作のうちで最も独創的なものとして挙げられるのは、メルキオーレ・チェザロッチェの『言語哲学論(Saggio sulla filosofia delle lingue)』(1800)であろう。この本は、もともと『イタリア語について(Saggio sopra italiano)』(1785)として出版されたものを増補改訂したものである。そうした成立の事情もあって、「言語哲学」という書名にふさわしく、文法論、比喩論、意味論に関する抽象的議論が展開されていると同時に、具体的なイタリアの言語状況とその歴史に関する議論も多く含まれている。そのなかでも、イタリアの言語規範をめぐる「言語問題」については、多くのページが割かれている。

チェザロッチェは冒頭で、「言語の進歩を妨げる意見」(Cesarotti 19)が文学者のあいだに蔓延していることを批判し、以下のような8つの原理を立てる。

1. いかなる言語も初めから優雅でも粗野でもない。
2. いかなる言語も純粹ではない。
3. いかなる言語も事前の計画によって形成されない。
4. いかなる言語も私的あるいは公的な權威によってではなく、多数者の自由な無言の合意によって形成される。
5. いかなる言語も完全ではない。
6. いかなる言語も十分に豊かではない。
7. いかなる言語も不変ではない。
8. いかなる言語も国民(nazione)によって統一的に話されない。

(Cesarotti 1969: 20-22)

チェザロッチェはそれぞれの原理が成り立つ根拠とそこから引き出される結論を細かく論じているが、ここでは省略する。とはいえ、この8つの原理を見るだけで、チェザロッチェがいかに言語の動態性、歴史性、変異性を重視しているかがわかる。そして、「言語の進歩は常に精神の進歩に比例する」(Cesarotti 1969: 28)という認識がこれらの原理を

支えている。チェザロッチィによれば、言語を進歩させるには、借用、造語、比喩などの手段を積極的に用いて言語を富裕化する必要がある。クルスカのように、言語規範を過去の文学言語に全面的に依拠させるなら、言語は貧困化し、ひいては「死語」になってしまうとされる。さらに、言語が少数の文学者によってではなく、「多数者の自由な無言の合意」によって作られるとする認識がそこに加わる。この認識は、特定の時代(1300年代)の特定の都市(フィレンツェ)の文学者だけが言語を占有してはならないとする見方につながり、必然的にチェザロッチィを「イタリア主義者」の立場に近づけることになる。

事実、チェザロッチィは、16世紀の「言語問題」を論じる際にトリッシーノの立場を支持する一方で(Cesarotti 1969: 101-102)、サルヴィアーティを厳しく批判する(Cesarotti 1969: 106)。したがって、クルスカ・アカデミーに対しても容赦のない批判が投げかけられる。チェザロッチィの見るところ、クルスカ辞書は「イタリア語」の辞書でも「トスカナ語」の辞書でも「フィレンツェ語」の辞書でもない。さらにはフィレンツェ文学の辞書とさえいえない。なぜなら、クルスカ辞書とは、1300年代のフィレンツェ作家とクルスカが認可した少数の近代作家の語彙を登録しているにすぎないからである。

それでは、チェザロッチィが言語の主人とみなす「多数者」とは何であろうか。それが「国民(nazione)」という概念となって現れてくるのである。チェザロッチィは、上のような理論的認識に基づいて具体的なプログラムを提出する。それが言語の「国民評議会(Consiglio nazionale)」といわれるものである。チェザロッチィは「言語は国民(nazione)のものである。言語に関する改新は、公的合意による承認を経なければならない」(Cesarotti 1969: 113)という認識に基づいて、フィレンツェにクルスカ・アカデミーに代わる「国民評議会」の設立を提案する。この評議会は「盲目的信仰」ではなく「理性的従順」を要求し、「思い違いの愛国主義」ではなく「国民的榮譽」を内にもちつつ、各地の主要都市に「地方評議会」を従えて、言語に関するあらゆる作業を執りおこなうものとされる。それは次のようなものである。イタリア語の語源の研究、方言辞書の作成、古典作家だけではなくクルスカが排除した作家の解釈、科学技術の各分野での語彙集の作成、他言語との比較研究、文献学的歴史辞書の作成、一般の書き言葉のための辞書の作成、等々。これを見れば、文学言語だけを対象にしていたクルスカ・アカデミーの狭い枠組みは破棄され、社会のなかで言語が取りうるあらゆる形態が対象になっていることがわかる。また、それとともに、規範設定と学問的研究が表裏一体のものとしてとらえられていることにも注目すべきである。

『言語哲学論』と銘打たれた著作に、このような実践的プログラムがはさみこまれているのは、異様に見えるかもしれない。しかし、これは理論家チェザロッチが夢見た単なる未来図ではない。というのは、その書物のもととなった『イタリア語について』が出版される2年前の1783年には、多くの知識人の反対を押し切り、トスカナ大公ピエトロ・レオポルドは、クルスカ・アカデミーを他のアカデミーと合流させて「フィレンツェ・アカデミー」を発足させた。つまり、このときクルスカ・アカデミーは発展的解消を遂げたのである。レオポルドは、兄ヨーゼフ二世を継いで1790年に神聖ローマ皇帝に就任するが、その間の期間には、トスカナ大公として啓蒙主義者を多く登用して、改革的な政策を推し進めていた。ある意味で、クルスカの解散はその一環であった。チェザロッチは、「国民評議会」が「啓蒙君主(Sovrano illuminato)のもとに置かれる」と述べたが(Cesarotti 1969: 113)、そのときに念頭にあったのはこのレオポルドのことである。だからチェザロッチは、ある程度の実現の期待をこめて「国民評議会」の計画を提案したと考えられるのである。

ただし、ここで注意すべきことがある。チェザロッチのいう「国民」とは、ひとつの言語を話す住民の総体を指すわけではなく、チェザロッチの提唱する「国民語(lingua nazionale)」は、けっして書き言葉の領域を出ることはないという点である。事実、チェザロッチの言語論の特徴は、書きことばと話しことばの役割が明確に区別されていることにある(cf. Marazzini 1999: 136)。チェザロッチによれば、「書きことばは、基礎に慣用(uso)、忠告者に〔作家の〕模範(esempio)、指導者に理性(ragione)をもたねばならない」(Cesarotti 1969: 28)のであって、「民衆の卑俗な慣用から法を受け取ってはならない」(Cesarotti 1969: 26)のである。たしかに、チェザロッチは「言語はまず話され、次に書かれる」(Cesarotti 1969: 79)ことを認めてはいる。とはいえ、書きことばは話しことばの完成体としてとらえられるのである。チェザロッチは、書きことばは「さまざまな地方の教養人(uomini colti)の精華によって構成される国民(nazione)」(Cesarotti 1969: 71)によって支えられるので、たとえ「無学な者には説明が要る」ような言語であっても、そこから「国民性(nazionalità)」という性格は失われないと主張する(Cesarotti 1969: 103)。したがって、チェザロッチの「国民語」は、あくまで「啓蒙化された公衆(pubblico illuminato)」のためのものであり、そのようなものとして自覚的にとらえられているのである。後のマンゾーニと異なり、チェザロッチには話しことばの次元での「国民」の言語統一という発想はまったく見当たらない。だから、上で挙げた8つの原理

のうちの最後のもの、「いかなる言語も国民によって統一的に話されない」という認識は、記述的言明であると同時に規範的言明でもあるわけだ。チェザロッチェの議論には、言語統一の前提としてのイタリアの政治的統一というパースペクティブが決定的に欠けているのは、ここから来る。この点は後に論じよう。

まさにこの認識が経路となって、チェザロッチェの議論にダンテの「高貴な俗語」の概念が入りこんでくるのである。チェザロッチェによれば、ダンテは『俗語論』において、作家の言語はトスカナ地方で生まれ育ったのではなく、さまざまな都市の最良の精神によって形成されてきたこと、民衆の方言には多くの不正確さと歪みがあるので、優れた作家たちはみな方言の特異性と特殊語法から遠ざかったこと、そして、優れた著作は「ダンテが宮廷的(*aulica*)と呼んだ言語、イタリアに共通の精選された言語(*lingua commune e scelta d'Italia*)」によって記されねばならないことを証明した。こうした言語は、特定の都市で話される必要はない。なぜなら、書きことばは、話しことばとは異なる役割をもつので、「国民に共通に理解されれば十分」(Cesarotti 1969: 103)だからである。

こうしてダンテの「高貴な俗語」の理念は、クルスカに批判的な啓蒙主義者たちの言説のなかで息を吹き返したともいえる。たしかに、ダンテの議論のなかには、啓蒙主義者たちが求めてやまなかったフィレンツェ中心主義への批判があった。しかし、それだけではない。そこには概念の時代的歪曲ともいうべきものがあった。こうして、ダンテの「高貴な俗語」の概念は、「イタリア全土の教養人が支える文化的書きことばとしての国民語」と読み替えられて、啓蒙主義言語論を支える重要な柱となっていくのである。

3 「イタリア共通語」の夢想——ペルティカリ『ダンテ弁護論』

クルスカ・アカデミーがトスカナ大公レオポルドによって、1783年にフィレンツェ・アカデミーのなかに吸収させられたことは上で見た。そのクルスカが自立した機関として再生することができたのは、他ならぬナポレオンのおかげである。

トスカナ大公国をフランスに併合したナポレオンは、1808年9月の勅令で「イタリア語の純粋性の保存」のためにクルスカ学会を立ち上げることを命じた。さらに妹エリザを大公としてトスカナ大公国を復活させた後の1809年4月の法令では、前言でトスカナ地方の住民は「最も完全なイタリア語を話す」ことが述べられた後、トスカナではフランス語とならんでイタリア語を公用語とすること、そして「イタリア語をその純粋さのまま

に保つことに貢献した」著作家に賞を授与することが定められた。そして最終的に、「かつてのクルスカ・アカデミーが再建される」ことを命じた1811年1月の法令によって、クルスカは完全に復活する(これらの法令の原文はParodi 1983: 123-125に収録)。1814年にナポレオンが失脚し、かつての大公フェルディナンド3世がフィレンツェに復帰した後も、アカデミーは存続し、現在に至っている。

このように、理念の上では時代から超然としたクルスカ・アカデミーといえども、当時の政治的な有為転変の影響を受けざるをえず、一時はその存続さえ危ぶまれたほどである。しかも、フランス語から流入する大量の外来語は、クルスカ・アカデミーが常に敵対した現象であったにもかかわらず、ナポレオンの手によってクルスカが復活させられたことは、クルスカの地位に微妙な影を落とすものとなった。こうしたなかで二つの現象が生じる。ひとつは、クルスカの外部での「純粹主義(purismo)」の教義の尖锐化である。たとえばそれは、1300年代フィレンツェ語の修辭性を排した「自然性」に言語的純粹性を見るチェーザリヤ、文学伝統を国民精神の発現とみなし純粹主義と愛国主義を結びつけたプロティに見られる⁽²⁾。しかし、この点を論じることは本論文の主旨からはずれるので、いまは省略する。

もうひとつは、クルスカの権威を全面的に打倒しようとするプログラムが作成されたことである。それが詩人ヴィンチェンツォ・モンティとその傘下に集まった知識人たちによる『クルスカ辞書へのいくつかの追加と訂正に関する提案』である。この書物は、1817年から1824年にかけて刊行され、最終的に全3巻、6分冊という膨大な分量に達した。

この書物が刊行されるに至る背景は以下の通りである。ナポレオン共和国時代のポーニャに、ナポレオンの命によって、フランス学士院に範をとり科学技術の進歩を目的とした学術組織が作られた。1810年にその組織はイタリア王国の首都であるミラノに移転し、科学文学芸術イタリア学院(Istituto italiano di scienze, lettere ed arti)という名称で呼ばれることとなった(この“italiano”という形容詞に注意)。その任務のひとつにイタリア語の辞書の作成があった。1816年にイタリア学院は、辞書の改革のための作業に関して、クルスカ・アカデミーに協力を要請するが、クルスカからは体よく拒絶され、しだいに辞書作成の話は立ち消えとなる(この間の消息については、Vitale 1988: 489-508が詳しい)。

モンティは当初からダンテの「高貴な俗語」の理念に頼りながら、「イタリア共通語」の

確立を目指していたが、最初からクルスカ辞書の権威を否定したわけではなく、ただその語彙の選択基準の緩和を主張したにすぎなかった(De Stefanis Ciccone1971: 62-73)。けれども、上で見たように、クルスカとの協力が期待できない状況になったとき、モンティはクルスカと全面的に対決する姿勢を取るようになる。その結果として生まれたのが浩瀚な『提案』だったのである。

モンティはいわゆる「イタリア主義者」の例にもれず、ダンテの「高貴な俗語」を念頭に置きながら、イタリア全土で理解されるが、どこの都市にも局在しないことばとして「イタリア共通語」の存在を主張した。その底に流れるのは、強烈な「反フィレンツェ」「反トスカナ」の意識であった(Abbatichio 2009: 164)。モンティによれば、クルスカがあればほど信奉するフィレンツェ語とは、単なる一都市の「方言」にすぎない。この点から見ると、上で触れたイタリア学士院とクルスカ・アカデミーの競合と対立は、ミラノとフィレンツェの間のイタリアの文化的ヘゲモニーをめぐる争いでもあった。

モンティの新しさは、古典主義的価値観を保持しながらも、近代の科学技術の進歩に開かれた言語規範の改革を訴えたこと(モンティが啓蒙主義的古典主義者と呼ばれることがあるのは、そうした理由からである。この点については、Timpanaro 1969: 11-14を見よ)、そして言語改革の社会的枠組みとして「国民(nazione)」の存在を重視したことにある。ただし、チェザロッチィの場合とおなじように、モンティが「国民語(lingua nazionale)」と呼ぶ言語は、話しことばとしてではなく、あくまで書きことばとして成立する。モンティによれば、多くの方言に分かれた国民(nazione)には、「すべての者に共通のことば(un linguaggio a tutti comune)」が必要であるが、すべての住民には特有の方言があるのだから、この共通語は「書きことば」でしかありえない(Monti 1817: XXXIX)。以下のことばには、モンティの言語観がよく現れている。

いまや次のことを理解すべきだ。あらゆる言語がしかるべき完成を受けとるのは、民衆からではなく知者から、市場からではなく学校から、揺りかごからではなく修練からである。なぜなら、美しく書くことは、自然(natura)ではなく、技芸(arte)に属するからである。技芸(arte)は乳母のそばの揺りかごのなかでは覚えられない。

(Monti 1817: XIV)

チェザロッチィにせよモンティにせよ、これほどまでに技芸 arte としての言語の価値

を強調するのは、クルスカ・アカデミーにわずかながらも残っていたフィレンツェ主義——フィレンツェで話される「慣用(uso)」の優越性を主張する立場——の要素を否定したいがためであった。ひとたび「言語問題」という舞台上上がったなら、フィレンツェから言語の占有権を奪うためには、言語規範が意識的な習得によってしか身に着かないことを強調せざるをえなかった。反対に、チェザリのような純粋主義のほうが、言語のあるがままの「自然性」を強調したのも不思議ではない。このように、「言語問題」を構成する言説のなかでは、論者の意図とは独立して、ある論点は必然的に他の論点に結びつく。そこには「言語問題」における〈言説の規則〉ともいべきものがある。ただし、この点は、「言語問題」全体をひとつの言説の集合とみなしたときに浮かび上がってくる論点であるので、ここで詳しく論じることはしない。

モンティと同じ立場に立ちながら、当時興隆しつつあったロマンス語文献学の知見で武装して議論を展開したのが、モンティの娘婿であるジューリオ・ペルティカリである。

ペルティカリは、モンティの『提案』の第1巻第1部として「1300年代の作家とその模倣者たちについて」(1817)を、第2巻第2部として「ダンテの祖国愛とその著書俗語論について」(1820)を発表することで一躍その名を知られることになる。これらのペルティカリの著作は、当時大きな影響を及ぼした(ペルティカリの生涯と著作については、Di Martino 1997を参照のこと)⁽³⁾。後にとりあげるマンゾーニが打倒すべき敵とみなしたのは、一方ではクルスカ・アカデミーであるが、他方では、「イタリア共通語」を主張するペルティカリの立場であった。この点もふくめて、ペルティカリの著作の意義については、マラッツィーニの次のような指摘が本質を突いている。

[モンティとペルティカリの]『提案』がなければ、マンゾーニは『俗語論』について黙ってやりすごすこともできたであろう。しかし、『提案』が刊行された後にそうすることはもはやできなかった。なぜなら、ペルティカリの論文(とくに二番目のもの)は、たとえそれがダンテの思想を当時の状況に無理やりあてはめて、古典主義者の論争的立場の支えとするためであったにせよ、ダンテの言語思想をよみがえらせるのに決定的な役割を果たしたからである。ダンテの復活は、それほど新しいことではないと反論されるかもしれない。というのも、クルスカのヘゲモニーに敵対する論者(18世紀にはグラヴィーナ、ムラトーリ、デニーナ、チェザロッチェ)は、いつも『俗語論』を引き合いに出してきたからである。しかし、ペルティカリほど『俗語論』を筋

道立てたやり方で使った者はいなかった。ペルティカリは、『俗語論』を自身の歴史と文学の組み替え作業全体の中心におき、それを導きの糸にしてイタリア語の形成を説明し、俗語の詩の最初の歩みを跡づけたのである。こうして『俗語論』は、16世紀の論争で占めた以上の大きな中心的な位置を19世紀前半に獲得することになったのである。(Marazzini 1989: 189)

ペルティカリの『俗語論』読解がひとびとを引きつけたわけは、当時最新のロマンス語文献学の成果に基づいて、ダンテのいう「高貴な俗語」の意味を解釈しなおした点にある。ペルティカリは、ラテン語からイタリア語などのロマンス語が生まれる前に、ローマ帝国の版図であった地域で共通に話されるひとつの言語があったとみなす。しかし、それは文字に書きとめられたことはない。なぜなら、そのことばは当時のひとびとにとって「粗野な(rustico)」なことばとみなされていたからである。ペルティカリによれば、イタリア各地の諸方言はラテン語から直接由来するというよりも、この失われた言語を経由していることになる。このことばは、ダンテが生きた1300年代にも存在していた。ペルティカリは、「この粗野なことば(favella rustica)は、ダンテが『俗語論』のなかで庶民の(plebea)〔ことば〕と呼ぶものに酷似している」(Peticari 1817: 25)という。つづいてペルティカリは、つぎのようにいう。

この〔粗野な〕ことばは常に民衆(volgo)のなかで生きていたし、長きにわたって話されてきたと考えるなら、以下のことは疑いえない。すなわち、そのことばはイタリアを「鉄の時代」にとどめていた。たしかに、それはわれわれにはよく知られていないことばである。それはもはやラテン語ではなかったが、まだイタリア語ではなかった。当時の書きことばとはまったく異なっており、一部は失われてしまった。そのことばをわれわれは「庶民のことば(plebea)」と呼ぼう。ダンテが『俗語論』でもおもしろに語りたかったのは、このことばのことである。(Peticari 1817: 25)

そして、ペルティカリによれば、ダンテが『俗語論』でやろうとしたのは、庶民(plebeo)が話す多数の粗野なことばから、洗練された音声、語彙、統辞法、文体をもった「高貴な俗語(volgare illustre)」を選別し、書きことばとして定着させることにあった。ペルティカリはそうしたダンテの意図を『俗語論』のなかの以下のような記述に見出す(訳文はダン

テ(1984)に基づく。))

すべての山間部や地方の住民のことば(rusticanas loquelas)を切り捨てよう。かれらのアクセントと話し方は都市の中心に住む人々にはつねにくずれた耳ざわりなもののように思われるからである。(I, xi, 6)(ダンテ 1984: 41)

イタリア人の用いる多数の洗練されていない語いや多数の混乱した構文や欠点の多い多数の音声要素や多数の粗野な(rusticanis)アクセントから、かくも高貴で明快で完ぺきで都会的な俗語が選りすぐられている(ピストイア人のチーノやその友人のカンツォーネに示されているごとく)のをみるにつけ[……](I, xvii, 3)(ダンテ 1984: 63)

事実高貴な俗語(vulgare illustre)はおのれに似つかわしい人々を求める。それは人間の他の伝統や習性と同様である。それゆえ大器の風格は偉業をなしあう人々を求め、紫の色は貴人を求めるのである。同様に当の俗語は天賦の才に恵まれ、学識ゆたかな人々を求めるのであり、それ以外の人々を受けつけない。(II, I, 5)(ダンテ 1984: 73)

さらにペルティカリは1820年の論文において、ロマンス文献学からの強力な援軍をフランスの学者レイヌーアールの著書に見出した⁽⁴⁾。レイヌーアールは、ペルティカリ同様、ラテン語とロマンス諸語のあいだの中間的な言語の存在を仮定し、たとえば824年の「ストラスプールの宣誓」はその言語で書かれたと主張していたからである⁽⁵⁾。

ペルティカリの二つの論文がこれまでにない新しさをもっていたのは、話しことば／書きことば、農村のことば／都市のことば、粗野なことば／高貴なことばの二つのレベルを峻別したうえで、イタリアの言語と文学の歴史を、前者のことばから後者のことばが選別される過程ととらえたことにある。その選別の仕事を進めたのは、優れた詩人たちである。「言語を優美な状態に高める作業はこれほど高尚で勇敢なものであるので、それは常に詩人たちの力によって与えられた」(Peticari 1820: 69)のである。

ペルティカリの立場が際立っているのは、こうした規範言語の選別の作業は、トスカナやフィレンツェのみで行われたのではなく、イタリア全土にひろがる知識人によって手

がけられたと主張したことにある。むしろ中心があるとすれば、それはシチリア王国のフェデリコ2世の宮廷であった。ペルティカリによれば、700年から1000年にかけてははなはだしい言語的混乱の時代であった。そこには統一的な言語の規範は存在しなかった。そうした状況のもとで、無数に散らばる「庶民のことば」のなかから、イタリアに共通する「高貴なことば」を取り出していったのが、フェデリコ2世の宮廷に集まる詩人たちであった。だからこそダンテは『俗語論』のなかで、これらの詩人を称賛したのであり、フィレンツェの文学者は、そうしたシチリアの詩人からイタリア共通語を学んだのである。こうしてイタリアの言語と文学の歴史におけるフィレンツェの中心性は否定される。まさに「トスカナ・モデルから完全に独立した『高貴な(illustre)』言語的伝統の存在」(Marazzini 1989: 195)こそ、ペルティカリの主張の根底にある考え方であった。

ペルティカリのテキストを貫通しているのは、「庶民的なもの(plebeo)を高貴なもの(illustre)から区別する」(Peticari 1820: 64)という視点、「話すことはすべての者に属するが、すべての者が優れたことばで書くことができるわけではない」(Peticari 1820: 65)という態度である。つぎのことばは、そうしたペルティカリの信念をよく言い表している。

民衆は昨日作ったものを今日台無しにする。彼らは自らの欲望に従うのであり、何の規則も抑制も知らない。同じ跡に留まらない。しばしば最良のものを最悪のものに変えてしまう。いつも自らの気紛れによって有為転変を後押しする。彼らはあらゆる堅固なものの破壊者である。しかし、それに対して古典的な作家(scrittori classici)は正反対の道を歩む。優れた者にとって良いもの、心地よいと思われるものを選び出す。役に立たないものを捨て去る。多くの疑わしい言葉づかいのなかから、明晰で調和のとれたものを選びとる。[……]こうして彼らは、民衆のことば(popolare favella)のなかから高貴な言語(lingua illustre)を抜き取ったのである。(Peticari 1820: 68)

1817年の論文の題名に「模倣者たち(imitatori)」という言葉があるが、これは決して否定的な意味合いをもつわけではない。むしろ詩人にとって古典を「模倣(imitazione)」することは、みずからの言語と作品を磨き上げるのに必須の作業とみなされた。ダンテの『俗語論』、そしてそこで提唱された「高貴な俗語」の理念は、こうしたペルティカリの言

語観と文学観を根底から支えてくれる拠りどころとしてとらえられたのである。

こうしたペルティカリの主張は、政治的文脈から離れた唯美主義的な性格のものではなかった。1820年の論文の第一部は「ダンテの祖国愛」と、第二部は「ダンテ弁護論」と題されている。すでに見たように、16世紀に『俗語論』の写本が「発見」されて以来、その書でダンテが「祖国」フィレンツェを厳しく批判したことに対して、とくにフィレンツェの文学者のなかでは、(たとえばマキャヴェッリがやったように)「祖国の裏切者」としてのレッテルを貼るような見方、さもなければ『俗語論』を偽書だとみなす見方が絶えずありつづけた。ペルティカリは、そのような見方に抗して、ダンテの「祖国愛」の意味を示すことで「ダンテ弁護論」を展開しようとしたのである。こうして論文の第一部では、当時の「教皇派」と「皇帝派」の対立のなかでのダンテの立場を考察し、最終的に政治的抗争のなかで祖国フィレンツェから追放されたダンテの心情が描かれる。さらに第二部では、『俗語論』がそうしたダンテの政治的変遷の帰結であるとみなされる。ペルティカリによれば、ダンテは『俗語論』において「祖国フィレンツェの状態に絶望し、誤りを犯した共和国の縛りを捨てて、言語の舵を取ることに向かった」のであり、「イタリア全体の栄光を考えていた」(Peticari 1820: 62)のである。さらにペルティカリ自身の「祖国」に対する心情がこう描かれる。

祖国(patria)とは、われわれが揺りかごで産声をあげたあの狭い壁の囲いのことではない。この高貴このうえない土地、周囲の海とアルプス山脈に区切られた土地、ひとつの共通のことばという甘美な絆によって結びついた1900万のひとつひとつが開くこの土地のことをいうのである。(Peticari 1820: 64)

この美しく描かれた「祖国イタリア」は、アドリア海に面した教皇領の小都市ペーザロ(現マルケ州)に生まれ育ち、ナポレオンとオーストリアの支配に翻弄されつづけた一貴族ペルティカリが心にかいま見た幻影であるかもしれない。そして、ペルティカリが『俗語論』のなかを読みこんだ「イタリア共通語」もまた(ちなみに、「1900万」とは当時のイタリアの総人口を指す)⁶⁾。

4 「国民詩人」ダンテ

これまで、『俗語論』への評価が移り変わってきた様子を見てきた。しかしそれとは別に、詩人としてのダンテの位置づけも時代とともに変化していった。優れた論考「ダンテ評価の変遷(Varia fortuna di Dante)」(Dionisotti [1967]1971: 255-303)のなかで、文学史家ディオニソッティはダンテに対する評価の時代的変転のありさまを明快に論じている。それによれば、18世紀に「天才」の理論が発展すると、文学伝統のなかの偉大な個人の役割に注目があつまるようになり、その結果、「詩聖」として選ばれたのがダンテ、ペトラルカ、アリオスト、タッソーの四大詩人であった。しかしこのなかでダンテに対する評価は、他の三人の上を行くものではなかった。それが一変するのは、18世紀末にフランス革命が引き起こした政治的動乱の時代においてである。その時代には、革命の余波として、「一種の国民的・市民的宗教として描かれた文学の公共的称賛」(Dionisotti [1967]1971: 267)という傾向が生まれた。そのなかでダンテは、しだいに他の三人の詩人よりも上位にあるものと位置づけられるようになった。「イタリア統一」が実現したリソルジメント期には、ダンテの地位が一挙に上がり、「国民詩人」の地位までに昇りつめることとなる。この点について、ディオニソッティはつぎのように言っている。

イタリア人が何よりも心にかけていた独立と国家統一の事業は、陰謀と行動の主役である政治家たちの心を動かすとともに、満場一致で国民全体の心を動かすような詩人の神話を求めていた。疑いもなく、この事業の決定的瞬間にあって、ダンテの神話こそこの両方の目的にかなっていた。(Dionisotti [1967]1971: 278)

こうした「ダンテ神話」が最高潮に達したのは、1865年にフィレンツェにおいて開催された「ダンテ生誕600年祭」である。1865年5月14日にサンタクロチェ教会の前でのダンテ像の除幕式に始まり、その後3日間にわたってダンテに関するさまざまな催し物が繰り広げられた。ひとりの文学者に対してこれほどの祝典が捧げられることはめったになかった。事実ディオニソッティは、「この祝典に似たものはそれまでイタリアに見られなかったし、それ以降も見られない」(Dionisotti [1967]1971: 279)とさえ言っている。

このダンテ生誕600年祭に関する研究書を著したユセフザデーは、多方面の資料を駆使して、この祭典の内容を復元しただけでなく、祭典が行われるに至った政治的経緯、計

画策定の過程、祭典に対する知識人や一般の反応、祭典が及ぼした影響などを詳細に記述している(Yousefzadeh 2011)。それによれば、ダンテの生誕 600 年祭を 1865 年 5 月に実施するという計画そのものは、1863 年 11 月にフィレンツェ市当局によって決定されていた(Yousefzadeh 2011: 44)。しかしこの祭典の意味を決定的なやりかたで変えたのは、1864 年 9 月にイタリア王国の首都がそれまでのトリノからフィレンツェに移ることが決定したときである(Yousefzadeh 2011: 22)。ヴィットリオ＝エマヌエーレとナポレオン三世の合意で実現したこの遷都は、地方の一都市という立場にあったフィレンツェを一举に王国の首都へと昇格させた(なお、1870 年に王国軍によってローマが占領され、翌 71 年ローマが首都として宣言されると、フィレンツェは首都としての地位を失う)。そのときフィレンツェが国民国家の文化的中心としての立場を花々しく宣伝するために、ダンテほどふさわしい文化遺産はなかった。皇帝派の立場にあったダンテが教皇派の手によってフィレンツェから追放されたというダンテの政治的遍歴それ自体が、当時まだローマを併合しておらず、教皇と対立していたイタリア王国の状況に合致したという面もある。その一方、この祭典はフィレンツェの大詩人ダンテを「国民化」すること、ダンテをフィレンツェの占有物ではなくイタリア全体が共有する財産として登録することを目指していた。「国民詩人」ダンテの神話化がこうして成しとげられたのである。

ただし、この祭典の意味はそれだけにとどまらない。リソルジメントと呼ばれるイタリア統一の実現は、ピエモンテ王国による他の地域の併合という形をとった。したがって、ピエモンテ以外の地方では、イタリア統一といっても、実際には「ピエモンテ化」のことではないかという疑いが消えず、ピエモンテの姿勢への反発さえ生まれていた。この文脈で見るなら、ダンテ生誕 600 年祭は、フィレンツェによるピエモンテ化への抵抗という側面がある。ユセフザデーによれば、王国の首都となったフィレンツェは、国民国家という枠組みを維持しながらも、そのなかで自分たちの地方のアイデンティティを打ち立てようとした。ダンテ生誕 600 年祭はこうしたフィレンツェの意向を明確な形で表わすものであった。この祭典を通じて、フィレンツェのエリートたちは、新たな国民国家の文化的中心——「新生イタリアのアテネ」——としてのフィレンツェの地位を確立しようとしたのである。「それまで議論の余地なく政治的・行政的・軍事的首都であったトリノに取って替わる中心という構想を固めようとするフィレンツェの努力」(Yousefzadeh 2011: 3-4)がそこにはあった。ある意味で、1865 年のダンテ生誕 600 年祭は、国民性とフィレンツェ性という二つの極のあいだの微妙なバランスのうえに成り立ったものである

といえる⁽⁷⁾。

この祭典を永続的に記念するものとして、ダンテについてさまざまな文筆家に寄稿を依頼して編集した書物が企画された。それが1865年に刊行された『ダンテとその世紀』である(Cellini 1865)。この本は二巻に分かれ、総勢51名の書き手が名を連ね、全体で1000ページに達しようという大部の書物である。この分量だけでも、この本が一大企画であったことがよくわかる。その序文で、編者であるマリアーノ・チェッリーニとガエタノ・ギヴィッツァーニは、つぎのようにいっている。ダンテの「神話化」がどれほどのものに達したのかをよく示すことばである。

ダンテに授けられる栄光は、特定のひとびとの手によるものではない。それは国民全体(Nazione tutta)のいやすず荘厳な行為である。フィレンツェに生まれイタリア全体の市民にして大詩人であったダンテに対して、各地方の都市が競い合ってイタリア全体の称賛を捧げたという事実以上に、この本における営みの国民性(nazionalità)を指し示し表現するものは他にないであろう。ダンテはイタリアのものだけではない。あらゆる国民にとって新たな文明のホメロスでもあるのだ。(Cellini 1865: XVI)

この本に収められたひとつひとつの文章は、ダンテの生涯や当時の社会状況を扱ったもの、個々の作品を論じたもの、ダンテの政治思想・哲学・宗教に関するものなど、ダンテに関するありとあらゆるテーマを取り上げている。そのなかにはダンテの『俗語論』を論じたものもある。それが、当時著名な教育学者にして政治家であったラファエロ・ランブルスキーニによる「ダンテは『高貴で枢要で宮廷的で法廷的なことば(idioma illustre, cardinale, aulico, curiale)』によって何を言おうとしたのか」(Cellini 1865: 655-668)である。

ランブルスキーニは、ダンテの「高貴な俗語」の解明に取り組むまえに、言語についての一般的事実として、言語がどのように形成され、どのように諸方言に分岐するのか、どの地方のことばが書きことばとして選ばれるのか、文字に書かれることで話しことばはなにを獲得しなにを失うのか、などの点を考察しなければならないという。ランブルスキーニによれば、言語は人間の意志や反省によってではなく、「衝動と自然の力によって」生まれる。言語はちょうど植物の種が発芽し、成長し、花を開かせるように発展していく。

しかし人間の気質や環境の違いなどの要因で、話しことばはさまざまな方言に分岐していく。方言はそれぞれの集団内部で完結し、外部との接触が失われる。だが、「成長した文明が俗語で書くことを要求する」ようになったとき、状況は一変する。それまでばらばらに存在し、自然の力のままに存在していたことばは、書くという技芸(arte)によって規則化される。けれども、これによって「自然」が失われるわけではない。ランブルスキニーは、「自然(natura)がことばをひとの唇に乗せたように、自然はことばをペンから発させる。かつて粗削りで質素であった自然は、いまや技芸(arte)が自らを洗練させるのを待っている」という。ランブルスキニーによれば、これが「話しことばの自然で一般的な歩み」である。ことばは「自らの墮落した姿である諸方言を置き去って、書物のことばへと上昇する内的な力」をもっているのである。

こうした言語の一般的な発展史を念頭において、ランブルスキニーはダンテの「高貴な俗語」を解釈する。ランブルスキニーによれば、ダンテの時代の言語状況はまさに上で描いた通りのものであった。ラテン語に代わって俗語を使おうとする要求が高まる一方で、地方のさまざまな方言のあいだには統一はなく、文学においても文法違反や破格表現がはびこっていた。まさにそうした状況を前にして、ダンテはイタリア全体に共通する「高貴な俗語」を打ち立てようとしたのである。ランブルスキニーが強調するのは、この「高貴な俗語」は作家の手によって人工的に作り出されたことばではないということである。もちろんこれは、イタリア各地の方言から要素を選び出して作り上げたものとして「イタリア共通語」ととらえる「イタリア主義者」に対する批判であることはいうまでもない。ランブルスキニーによれば、「ダンテは、書かれるべきこの俗語が卑俗な汚物から清められ、自身が『文法の技芸(arte grammatica)』と呼ぶ規則性と適合性に還元されることを望んでいた」(Cellini 1865: 662)。この資格に合う俗語はトスカナ語しかなかった。なぜなら、「ダンテが『俗語論』のなかで彼が求める高貴な俗語の例として挙げる章句のどれを見ても、その章句はまぎれもないトスカナ語である」(Cellini 1865: 663)からである。

それでは、ダンテが『俗語論』のなかでトスカナ語を悪しざまに批判したのは、どうしてなのだろうか。ランブルスキニーによれば、ダンテは話しことばに見られる不規則な表現を批判したのであって、トスカナ語の価値を否定したのではない。「ダンテが無知な者や粗野な者の話すトスカナ語を捨て去って、トスカナの詩人や非トスカナの詩人の詩句のなかの真のトスカナ語——そのようにはっきりと名指されているわけではないが——を受けいれ称賛したことは不思議ではない」(Cellini 1865: 664)。すなわち、ダンテのい

う「高貴な俗語」とは、書きことばとして規範化されたトスカナ語のことなのである。

とはいえ、ランブルスキーニは、ダンテの「高貴な俗語」の意味を問うことはあまり意味がなくなったと述べる。なぜなら、「われわれはダンテがもはや理解しないであろう言語を話し書いている」からである。「国民(Nazione)」としてのイタリアが成立した以上、すべての者は「自然によって形づくられた美しいイタリア語が存在するという堅い信念」をもつべきなのである。そしてランブルスキーニは、文の結びとしてダンテ生誕 600 年祭の意義にふれ、イタリアのどの地方から来たかを問わず、すべての者がダンテ像の前で「これからはイタリア的に話し書く (*parlare e scrivere d'or in poi italianamente*)」ことを約束するべきだと訴える。こうしてみると、ランブルスキーニは、イタリアには国民語としてのイタリア語がすでに存在すると考えていたようである。

上で見たようなランブルスキーニの『俗語論』解釈は、イタリア各地の方言要素によって成り立つ「イタリア共通語」の存在を想定したペルティカリのような「イタリア主義者」の立場を真っ向から否定するものである。ランブルスキーニが言語の *natura* を重視したのは、いかなる書きことばといえども特定の土地で話されることばに基づくことを強調しなかったからである。ただしランブルスキーニは、言語の規則化、標準化における *arte* の役割も重視する。サルヴィアアーティにおいてそうだったように、現実在即していうなら、*natura* とはフィレンツェの話しことばの慣用であり、*arte* とはフィレンツェ文学の書きことばの伝統を指す。すでに何度も指摘したように、この *natura* と *arte* のバランスこそ、伝統的なフィレンツェ主義者が心がけていた態度なのである。

したがって、作家には「話しことばを書きことばに高めるという貴い任務」(Cellini 1865: 667)があるという考えは、ペルティカリにもランブルスキーニにも共通してみられることは忘れてはならない。この考えは、誰でも受け入れることのできる常識的な意見のように見えるかもしれない。しかしそうでないことは、次に論じるマンゾーニの言語思想を見れば歴然とする。というよりも、マンゾーニの介入によって、言語問題はいままでとは全く異なる次元に突入するのである。ランブルスキーニとは異なり、マンゾーニは、「国民語」としてのイタリア語はまだ成立していないと考えたからである。

ランブルスキーニは、この3年後、文部大臣エミリオ・プロリオのもとに設置された言語統一委員会の副委員長ならびにフィレンツェ部会長を務めることになる。そのときの全体の委員長の職にあったのがマンゾーニであった。

盛大に開催されたダンテ生誕 600 年祭には、何人かの著名な文学者が欠席をした。そ

のなかのひとりが小説家マンゾーニである。すでに80歳という高齢に達していたマンゾーニは、フィレンツェ市当局から祭典に招待されたはしたものの、「健康上の理由」からやんわりと欠席を伝えた(Yousefzadeh 2011: 126)。本当の理由はわからないが、この3年後には、高齢をおしてイタリアの言語統一案の作成に情熱的に関与していった姿と比較して見るなら、マンゾーニはこの祭典にそれほど食指が動かなかったのではないかとも思われる。それに、すでにマンゾーニは、言語問題に関して、祭典の背後にいた伝統的フィレンツェ主義者とはまったく異なる意見を抱いていた。しかし、その点については、稿をあらためて論じることとする。

注

- (1) ただし、クルスカ・アカデミーは自らの立場を言い表すために、「純粋主義(purismo)」という用語を用いなかった。それに当たる概念を言いあらわす用語が初めて現れるのは、17世紀フランスにおいてである。この点については、Vitale 1986の詳細な論考を参照のこと。
- (2) チェーザリは、文学作品ではなく、1300年代のトスカナ語そのものに言語の「純粋性」が宿っているとみなす。チェーザリは「1300年代という清らかな時代において、すべての者が美しく話し、書いた。商人の会計簿、税関の台帳、税務署やあらゆる商店の帳簿がおなじ黄金をもたらしていた」(Cesari 2002: 11、傍点引用者)とさえ言う。また、文芸批評家デ＝サンクティスは、ナポリでの学生時代を回想したエッセイ「最後の純粋主義者」(1868)のなかで、次のようにプオティ学派を称賛した。「過去は神学校、田舎教育と呼ばれ、進歩は純粋主義、バジリオ・プオティ学派と呼ばれていた。この聖なる名前をナポリ人は常に尊敬の念をもって思い起こすことであろう。それは若者たちがそのもとに結集する旗であった。この名前は自由、学問、進歩、解放、神学校に対する戦い、いまだ明確ではないが新たな思想、新たな文明への希求を意味していた。純粋主義は1860年に完結したこの偉大なドラマの第一幕であった」(De Sanctis 1965: 249)。こうした局面を指してディオニソッティは、1500年代文学の貴族的で修辭的な伝統を断ち切ったのは、啓蒙主義者でもロマン主義者でもなく、「自然(natura)」と「民衆(popolo)」を結びつけた純粋主義者であるとさえ評価する(Dionisotti [1967]1971: 121)。ただしこの見解に対しては、ティンパナロの批判がある(Timpanaro 1969: 157)。
- (3) たとえば、スタンダールは「ペーザロのベルティカリ伯爵がいま現在イタリア文学の先頭にいる」と評しながらも、ベルティカリの晦渋で回りくどい文体について、つぎのような辛辣な言

葉を残している。「多分また、一群の十四世紀の言い回しが、巧みにかれらの考えに当て填められ、それでかれら〔ベルティカリとジョルダーニ〕はつぎはぎだらけに書いているのだ。これらの方々のように言うならば、かれらの散文は言葉の大洋と観念の砂漠のように思われる、と僕は言うところだ」(スタンダール 1992: 49)。「言語問題」とスタンダールとの関係については、Vitale 1988: 565-619 を参照のこと。

- (4) ベルティカリとレイヌアーールの関係については、Marazzini 1989: 188-195 を参照のこと。ただしレイヌアーールと異なり、ベルティカリはイタリア語がプロヴァンス語よりも古い段階を示すと考えていた。ベルティカリによれば、南仏のトゥルパドゥールは、イタリアの各地で話される俗語から「ロマンス共通語」の種を採集して、詩作に使ったのである。とはいえ、ベルティカリのレイヌアーールへの依拠のしかたは「援軍を見出した」どころではなく、ほとんどパラフレーズに近いものであったようだ。この点については、Di Martino 1997: 172-173 を参照。
- (5) ロマンズ言語学の研究史をたどった古典的名著であるヨルダンの本では、レイヌアーールはロマンス文献学の祖とみなされている(Jordan 1970: 6-8)ただし、レイヌアーールの誤りは、ラテン語と現在のロマンス語のあいだの中間形態として、「ロマニア(Romania)」全体に共通して話されることば、レイヌアーールが「ロマン語(roman)」と呼んだ言語の存在を仮定したことにあるとされている。
- (6) この引用だけを見るなら、ベルティカリは「イタリア共通語」をイタリアに住むすべての者に共有されたことばとして描いているように見える。しかしベルティカリの把握がそうでないことは、これまでの叙述から明らかだろう。むしろここではベルティカリが「イタリア」に対して寄せた政治的願望が表わされていると見たほうがいだろう。ちなみに、言語学者デ・マウロの試算によれば、イタリア統一時に標準イタリア語を話せた者は総人口のうち2.5%にすぎなかったとされる(De Mauro [1963] 2011: 43)。そうした現実から見るなら、ここではベルティカリの思いが「幻影」であったことは歴然としている。
- (7) この祭典は、フィレンツェから追放されて客死したダンテを祖国フィレンツェに取り戻す試みでもあった。たとえば、祭典の一環として、ダンテの遺灰をラヴェンナから取り戻す計画まで立てられたほどである(Yousefzadeh 2011: 50)。ただしこれはラヴェンナの反対にあって実現はしなかった。

参考文献

- Accademia della Crusca (1612) *Vocabolario degli Accademici della Crusca*, Venezia: Giovanni Alberti.
- Abbatichio, Rossella (2009) *La «ragione delle parole». Dal «Caffè» al «Conciliatore»: discussioni su lingua e cultura*, Lecce: Pensa MultiMedia.
- Cellini, Mariano e Gaetano Ghivizzani (cur.) (1865) *Dante e il suo secolo*, Firenze: M. Cellini.
- Cesari, Antonio (2002) *Dissertazione sopra lo stato presente della lingua italiana*. Testo critico e commento di Alessandra Piva, Roma-Padova: Editrice Antenore.
- Cesarotti, Melchiorre (1969) *Saggio sulla filosofia delle lingue*, a cura di Mario Puppo, Milano: Marzorati.
- De Mauro, Tullio ([1963] 2011) *Storia linguistica dell'Italia unita*, Bari: Laterza.
- De Sanctis, Francesco (1965) *Saggi critici*, vol. 2, a cura di Luigi Russo, Bari: Laterza.
- De Stefanis Ciccone, Stefania (1971) *La questione della lingua nei periodici letterari del primo '800*, Firenze: Olschki.
- Di Martino, Anna Maria (1997) *“Quel divino ingegno” Giulio Perticari. Un intellettuale tra Impero e Restaurazione*. Napoli: Liguori.
- Dionisotti, Carlo ([1967]1971) *Geografia e storia della letteratura italiana*, Torino: Einaudi.
- Iordan, Iorgu and John Orr (1970) *An Introduction to Romance Linguistics: its Schools and Scholars*, revised by R. Posner, Oxford: Blackwell.
- Marazzini, Claudio (1989) *Storia e coscienza della lingua in Italia dall'umanesimo al romanticismo*, Torino: Rosenberg&Sellier.
- Marazzini, Claudio (1999) *Da Dante alla lingua selvaggia. Sette secoli di dibattiti sull'italiano*, Roma: Carocci.
- Monti, Vincenzo (1817) *Proposta di alcune correzioni e d aggiunte al vocabolario della Crusca*, Vol. I, Parte I, Milano: Imperiale Regia Stamperia.
- Monti, Vincenzo (1820) *Proposta di alcune correzioni ed aggiunte al Vocabolario della Crusca*, Vol. II, Par.II, Milano: Imperiale Regia Stamperia.
- Parodi, Severina (1983) *Quattro secoli di Crusca*, Firenze: Accademia della Crusca.
- Perticari, Giulio (1817) Degli scrittori del Trecento e de' loro imitatori, in Monti 1817, pp. 1-239.
- Perticari, Giulio (1820) Del amor patrio di Dante Alighieri e del suo libro intorno il volgare eloquio. in Monti 1820, pp. 1-447.
- Roverato, Girgio (cur.) (1975) *Il Caffè. Le riviste dell'Italia moderna e contemporanea, t.3*, Treviso: Canova.

- Tabouret-Keller, Andrée (éd.) (1997) *Le nom des langues I – Les enjeux de la nomination des langues*, Louvain-la-Neuve: Peeters.
- Timpanaro, Sebastiano (1969) *Classicismo e illuminismo nell'Ottocento Italiano, Seconda edizione*, Pisa: Nistri-Lischi.
- Vitale, Maurizio (1978) *Questione della lingua*, Palermo: Palumbo.
- Vitale, Maurizio (1986) *L'oro nella lingua. Contributi per una storia del tradizionalismo e del purismo italiano*, Milano-Napoli: Riccardo Ricciardi.
- Vitale, Maurizio (1988) *La veneranda favella. Studi di storia della lingua italiana*, Napoli: Morano Editore.
- Vitale, Maurizio (1992) *Studi di storia della lingua italiana*, Milano: LED.
- Yousefzadeh, Mahnaz (2011) *City and Nation in the Italian Unification. The National Festivals of Dante Alighieri*, New York: Palgrave.
- スタンダード(1992)『イタリア旅日記Ⅱ — ローマ、ナポリ、フィレンツェ(1826)』白田絃訳, 新評論.
- ダンテ(1984)『俗語詩論』岩倉具忠訳注, 東海大学出版局.
- (かすや けいすけ/言語社会研究科教授)

(本研究は JSPS 科研費 15K02409 の助成を受けたものである。)